

世界の視点

研究代表者 栗原 隆

「世界の視点」は、哲学がその世界観や体系、さらには思想世界を構築する際の拠って立つ視座を見極めることから、そのテキストを解明する端緒とすることを目指す共同研究である。とりわけ哲学史に埋もれた思索を発掘することから、従来語られてきた哲学の歴史的展開とは違う筋道、いわば伏流となった思潮を照射するところから、もう一度、テキストを読み直し、その思索の組み換えの必要さえも明らかにする姿勢が、共同研究メンバーに共通した姿勢である。

構成メンバーは、科研費受託共同研究「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」に参画し、さらには、科研費受託共同研究「思想表現媒体から捉え直される、人間にとっての『空間』構成の意義についての研究」（代表・佐藤徹郎教授）のメンバーでもあるので、種々の機会に研究会活動が展開されている。平成一七年度に関しても、既に8月6日（土）にはCLLICで、と8月7日（日）には「クロスパルにいがた」で開催され、さらに10月1日（土）と10月2日（日）での実施に向けて、準備が進行中である。ここでは、昨年度の活動について報告したい。

平成16年度は、研究発表会については二回、開催した。一回目は、科研費受託共同研究「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」に参加する形で、8月21日（土）と、22日（日）、蔵王温泉「KKR白銀荘」で行われ、城戸淳が、「カントの崇高論——芸術終焉論の文脈のなかで」を発表、また栗原隆は「芸術終焉論の研究状況について」を報告した。

2回目の研究会は、11月21日（日）、「新潟大学人文学部哲学・人間学研究会」との共催で「新潟市歴史博物館」にて市民公開の形で開催、栗原隆が、「精神と文字」という標題のもとで、アストの『解釈学』の翻訳の紹介をも含めて、研究報告を行った。

活字化された成果としては、山内志朗については、論稿「ドゥンス・スコトゥ

ス『存在の一義性』(『現代思想』平成16年9月臨時増刊, 32~35頁) 2004年9月, ならびに解説「アドリアヌス・ヘーレブール『哲学探究』について」(新潟大学人文学部『人文科学研究』第116輯, 57~73頁) 2005年3月, ならびに, 共著『大学における共通知のありか』(栗原隆・濱口哲(編), 東北大学出版会, 286頁)に論稿「〈覚えること〉と〈創造すること〉」(271~280頁)を寄稿した。ちなみに同書は, 印刷が遅れて, 2005年5月の刊行へとずれ込んだものの, 平成16年度の学長裁量経費を受託しての出版企画であった。

城戸淳は, 翻訳, ピーター・バーク著『知識の社会史——知と情報はいかにして商品化したか』(新曜社, 408頁)を井山弘幸教授と共訳, 2004年8月に刊行した。また, 論稿「カントの Cogito ergo sum 解釈——カントにおける自己意識の問題」(新潟大学人文学部『人文科学研究』第116輯, 23~47頁)を発表するとともに, 共著『大学における共通知のありか』(栗原隆・濱口哲(編), 東北大学出版会, 286頁)に論稿「〈科学〉と〈哲学〉」(85~99頁)を寄稿した。

栗原隆は, 共著『公共性の哲学を学ぶ人のために』(安彦一恵・谷本光男(編), 世界思想社, 330頁, 2004年8月)に, 論稿「共同に服しながら自由であるとはどのようなことか——ヘーゲルに即して」(274~286頁)を寄稿するとともに, 2004年9月には, 単著『ヘーゲル——生きてゆく力としての弁証法』(NHK出版, 125頁)を刊行した。また, 論稿「精神と文字——理解と解釈のよすが」(新潟大学人文学部『人文科学研究』第116輯, 49~67頁)を発表。さらに共著『大学における共通知のありか』(栗原隆・濱口哲(編), 東北大学出版会, 286頁)を編集するとともに, 論稿「〈信頼すること〉と〈共同すること〉」(191~204頁), ならびに論稿「〈体験すること〉と〈理解すること〉」(257~270頁)を執筆した。

本プロジェクトは今後とも活発な研究活動を展開する所存であるので, ご支援, ご理解を賜りたく, 願ひ上げるものである。

2005年8月25日